The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	延喜御集校訂四題
Author(s)	滝川, 幸司
Citation	詞林. 2025, 77, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100771
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

延喜御集校訂四題

滝川　幸司

はじめに

『延喜御集』は、醍醐天皇とその周辺、後宮の女性や近臣の和歌を収める家集である。『大鏡』第一・醍醐天皇[1]に、本集にも所収される藤原伊衡と醍醐の贈答歌（8、9）を引いて、「御集など見たまふるにぞ、いとなまめかしう、斯くやうの方さへおはしましける」とあり、平安後期には成立していたことが確認できる。但し、醍醐歌が勅撰和歌集に四十首以上確認できるのにも拘わらず、本集とは六首しか重ならないため、伝存過程で脱落した[2]、現存御集と性格の異なった別の御集があった[3]などの説がある。

『延喜御集』は宮内庁書陵部蔵『代々御集』（五〇一・八四五）所収本が伝わるのみである[4]。近世初期写と目される該本によって読むわけだが、転写を重ねたためか誤写・脱落を生じており、読解に苦労するところも多い。しかし他の文献に同じ歌が収載されている場合はそれを参考に校訂できる。例えば22番歌である。

ふるさとのもみぢおりくる旅人は錦を着てやひなは越ゆらん

本歌も難解なのだが、詞書によれば、叙爵された蔵人が親のいる信濃に帰ると聞いて、醍醐が衣を送る際に詠んだ歌で、いわゆる「故郷に錦を飾る」の故事を踏まえている[5]。それが下句「錦を着てやひなは越ゆらん」に表れている。「ひな」が疑問となるが、本歌は『続古今和歌集』に収載されている。歌のみをあげる。

ふるさとのもみぢ見にゆく旅人は錦をきてやひるはこゆらん

（続古今集・離別820）

本集の「ひな」が続古今では「ひる」となっている。「故郷に錦を飾る」は「富貴不帰故郷、如衣錦夜行（富貴にして故郷に帰らざるは、錦を衣て夜に行くが如し）」（漢書巻三十一・項籍伝[6]他）の措辞に基づく。立身出世して故郷に帰らな

いのは、錦を着て夜に歩くようなものだという。本歌では、叙爵して故郷に帰るのだから、夜ではなく昼に行くのだろうというのである。『続古今集』の「ひる」が故事を勘案してもふさわしく、本集の「ひな」は「ひる」に校訂すべきなのである。「な（奈）」と「る（留）」の字形相似による誤写である。

しかし、本集では、他文献に載る歌は全体の半数しかなく、本文の不審は意改を加えるしかないのである。本集にはいくつか先行研究が存するものの、[7]『新編国歌大観』で「ママ」と示される以外、不審本文を問題とする論はほぼない。本稿を草する所以である。

本稿では不審本文と思われる和歌三首及び詞書一例を取り上げて、校訂私案を提起する。和歌については表現の類型があり、本集に多く収められている贈答歌は、贈歌・答歌の表現に校訂の根拠を見出せる場合もある。本稿もその贈答歌をとりあげる。また、本集は物語化された集ということもあり、長い詞書を持つ例も多い。しかし、ここにも誤写があるようで、読解に困難がともなう。和歌以上に校訂する根拠が見出せない場合が多いが、一例、不審本文を取り上げて検討したいと思う。

一、16番歌―「たひなかせる」

まず16番歌を取り上げる。問題となる四句目は翻刻のままとした。

月明かゝりけるに、蔵人たち出でゝみるに、思ふ心ありけるがよみける

月影の明石の浦にながめつゝたひなかせるは我れにやあるらん

詞書では、月が明るい折りに蔵人たちが外に出て、その中で悩みがある者が詠んだと説明される。問題となるのは四句目の「たひなかせる」である。

上句は、「明石」に、月が「明かし」を掛けている。本歌以後の作になるが、次の例がある。[8]

月の明かく侍りしに、人とものいひ侍りしに、千鳥のなきしかば

浜千鳥いづこになくぞ月まつと

といひしかば

明石の浦と思ふなるべし

（実方集299）

実方の句に付けられた「明石の浦と思ふなるべし」は、月が明るい時に千鳥が鳴いたので、浜千鳥はどこで月を待つと鳴いているのか、と問うたところ、明石の浦と思っているのだろうと答えたものである。詞書に「月の明かく侍りしに」と示されるように、千鳥が鳴いているのは、月が明るいので明石の浦だと思っているのだろうというのである。

播磨の明石といふところに潮湯浴にまかりて月の明

かかりける夜、中宮の台盤所にたてまつりはべりける　　中納言資綱

おぼつかな都の空やいかならむこよひ明石の月をみるにも

（後拾遺集・羈旅523）

詞書に「月の明かかりける夜」とあることからも、四句目は、今宵、明るい明石の月を、と掛詞として理解すべきであろう。御集歌でも詞書に「月明かゝりけるに」とあった。

遡れば、『万葉集』に、

羈旅歌一首

……居待ち月　明石の門ゆは　暮されば　潮をみたしめ

……

（万葉集巻三・雑歌388）

とあり、「居待ち月」を枕詞として「明かし」から「明石」を導いている例がある。

このように月の明るい明石の浦で物思いにふけりつつ（「ながめつつ」）、「たひなかせる」のは私なのであろうか、と詠むのが本歌なのだが、「たひ」はそのままでは理解できない。「たび」（旅）などが想起されるものの、「なかせる」（流せる／泣かせる）との繋がりが不明確である。

この歌には答歌がある。

これを聞こしめして、返し、我れをいはむと仰せられて

潮瀬くる海人の釣舟流るともいたくな泣きそ梶取りの長

「聞こしめして」「仰せられて」という敬語から、16番歌を聞いた醍醐の歌と考えてよかろう。この歌の二、三句は、16番を承けた表現で、16番で「たひなかせるは」と詠んだのに対し、「舟流るとも」と答えたのである。とすれば、16番の「たひ」は「ふね」であったのではないか。そして「舟」であれば「なかせる」は「流せる」と考えられよう。校訂すれば、次のようになる。

月影の明石の浦にながめつゝ舟流せるは我れにやあるらん

舟を流すという表現は、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　藤原興風

白浪に秋の木の葉のうかべるを海人の流せる舟かとぞ見る

（古今集・秋下301）

と、「流せる舟」の例もある。本歌の内容を考える際に参考になるのは、次の伊勢の長歌であろう。

七条の后うせたまひにける後に詠みける　　伊勢

沖つ波　荒れのみまさる　宮の内は　年へて住みし　伊勢の海人も　舟流したる　心地して　よらむ方なく　悲しきに　……

（古今集・雑体1006）

伊勢が仕えていた七条の后、藤原温子が歿した後に詠んだ

長歌で、温子の死によって「伊勢の海人」も舟を流してしまったような心地がして、寄る辺もなく悲しいと詠む。舟を流すとは、頼りにする寄り所がなくなる、そういう頼りなさを示している。本歌は、この伊勢歌を踏まえていると考えられる。伊勢歌では「伊勢の海人」が舟を流すというが、本歌では、月が明るい夜ということで、明石の浦の舟と詠み変えたのであろう。興風歌も含め舟を流すのは海人である。本歌は、舟を流して寄る辺がなく途方に暮れているのは私なのであろうか、と詠むのだが、あの海人のように、私は寄る辺がなく途方に暮れているのだというのであろう。

それに対して醍醐が、梶取りの長よ、舟を流したとしても「いたくな泣きそ」と慰めるのである。[9]

16番歌は贈答歌であり、答歌の表現から校訂することができる事例である。

二、2番歌―「きしはたかすそ」

次は2番歌である。1番歌とともに掲出する。1番歌は、『後撰和歌集』によみびと知らず歌として入集しており、[10]実際の作者については疑問がある。本集には他にも同様の例があるが、本稿では『延喜御集』に即して読解することとし、本歌も醍醐の歌として扱う。問題となる2番歌の結句は翻刻のままにした。

御門におはしましける中に、醍醐と聞こえさせ給ひけるぞ、なまめかしき御門におはしましければ、よき女持ち給へる人は、思ひきしろひ、御息所あまたなり給ひにける中に、時にものし給ひける、御いとまをただ一二日と聞こえてまかで給ひにける、程経ければ、御文に

人心頼みがたきは難波なる葦のうら葉のうらみつべきを

御返し

白波のたちかへりなむとも思ひしを難波の浦のきしはたかすそ

詞書は、本集の冒頭として醍醐天皇を紹介し、「なまめかしき御門」であったために、「よき女」を持つ人は競い合って入内させ、御息所たちが大勢になったのだが、その中で寵愛されていた方が、暇をただ一日か二日だけと申し上げて退出したのに、それ以上の期間が経ったので詠んだのが1番歌であると説明する。

醍醐は「一二日」といった御息所の「人心」の頼みがたさを恨むと詠む。「うらみ」を導くために「難波なる葦のうら葉」を用いている。「難波なる葦のうら葉」は、難波潟に生える葦の末葉のこと。難波の葦については、既に『万葉集』に「おしてる難波堀江の葦辺には雁寝たるかも霜の降らくに」（巻十・秋雑歌2135）の例がある。また、「葦のうら葉」も『万葉集』に「水門の葦のうら葉を誰か手折りし我が背子が振る手を見

むと我れそ手折りし」（巻七・旋頭歌1288）とある。但し、「難波の葦のうら葉」という組み合わせは本歌が古く、これ以前には見えない。以後は、次のような例がある。

対馬になりてまかりくだりけるに、津の国のほどより能因法師の許につかはしける　大江嘉言

命あらば今かへりこん津の国の難波堀江の葦のうら葉に（後拾遺集・別476）

六月つごもりがたに、住吉にまうでてかへりはべるに

難波潟葦のうら葉をふきかへす風の音しるき秋ぞきぬらし（能宣集221）

難波の葦についてくだくだしく説明したのは、これが返歌と関わるからである。返歌の上句はそれほど難解ではない。「白波のたちかへりなむとも思ひしを」は、白波が立ち返るように、私も帰ろうと思ったのだが、の意。四句目「難波の浦」は、贈歌の「難波なる葦のうら葉」を承けた表現である。問題は、五句目の「きしはたかすそ」である。『新編国歌大観』は「きしはたがすぞ」と濁点を付している。「誰がすぞ」で、「誰がするのか」の意と取ったのであろう。但し、「きし」（上句に「白波」が出るので「岸」であろう）とどのように繋がるのかは明らかではない。あるいは、岸のような障碍を作っているのは他ならぬあなたではないのですかという解釈もできるが、「岸」が二人の関係を隔つ障碍となる例をいまだ見出し得ない。

平野由紀子は「す」は「き」の誤写かとする。[11] そうすれば、「岸はたかきぞ」という結句となる。但し、岸が高いとする例もなかなか見出せず、「藤浪の岸より高く見えながら水のおもてにのどかなるかな」（中務集120・池にのぞける藤を）に、藤が岸より高く見えると詠む例が存する程度である。岸が高いので（天皇のもとに）戻ることができないといいたいのであろうが、どうして岸が高いことが戻れない理由となるのかが不明である。男側に何か問題があるといいたいのではあろう。また、白波・岸の縁から考えれば、波が立つという表現が想起され、「岸はたゝずぞ」と考え（「か（可）」と「ゝ」の誤写を想定）、岸には（波が）立たない、の意とも考えられる。「岸」に「立つ」「波」の例としては、「我れのみやかげとはたのむ白波も絶えず立ちよる岸の姫松」（貫之集28・道行人の馬よりおりて岸のほとりなる松のもとにやすみて浪のよるをみたる）という例があり、波が立ち寄る岸にある姫松を頼りとしようという。

しかし「岸」と考えるいずれの場合であっても、そもそも「難波の浦の岸」という表現が熟さないのである。

「難波」の「岸」の例は未見で、「我ならぬ人住の江の岸にいでて難波の方を怨みつるかな」（後撰集・恋六1022・文などつかはしける女の、ことをとこにつき侍りけるにつかはしけ

る・源ととのふ）は、住江の岸から難波の方向を見る例で、「まだしらぬ難波の浦の葦間わけこぎ行くかたや住吉の岸」（輔親集35・冬、住吉にはじめてまうづるに）は、難波の浦から住吉の岸に漕ぎ出す例である。このような例はあるが、本歌に「住吉」「住江」を想定することは困難であろう。「浦の岸」といういい方もほぼ見出せない。数少ない例として、「思ひ出でよ千代の子の日の春ごとにかつまの浦の岸の姫松」（元輔集42・すはうに侍るかつまのむまやといふ所にて子日し侍るとて）の例がある。このように考えると、そもそも「きし」に誤写を想定すべきではなかろうか。

とすれば、贈歌で検証したとおり、「難波」が「葦」で著名であることが重要となろう。「難波の浦」の「葦」も、「葦まよふ難波の浦にひく舟のつなで長くも恋ひわたるかな」（亭子院歌合56・右）の例が見える。ならば、この「きし」は「あし」であったのではなかろうか。「き（季）」と「あ（愛）」の誤写と考えるのである。

そして、この「あし」（葦）は「悪し」を掛けていよう。のちの例になるが、次の例は著名であろう。

難波に祓へしに或をんなのまかりたりけるに、もとしたしく侍りけるをとこの葦を刈りてあやしきさまに成りて道にあひて侍りけるに、をんなさしりげもなくて、年頃あはざりつることなどをよそにいひつかはしたりければ、このをとこのよみ侍りける

君なくてあしかりけりとおもふにはいとど難波の浦ぞすみうき

（拾遺抄・雑上530、大和物語・百四十八段）

他にも、次のような贈答歌がある。

ひさしうとあるだにたびたびになりにけるほどにうらみつの浜におふてふ葦しげみひまなくものを思ふころかな

内の御

うらむべきことも難波の浦におふるあしざまにのみ何思ふらん

（斎宮女御集124・125）

この答歌も、難波の浦に生える葦に「悪し」を掛けた例である。

つまり、御集2番の返歌は、御息所が帰ってこないことを恨んだ醍醐に対して、帰りたいとは思ったものの帰れないことを、誰が「葦」＝「悪し」きことをしているのですか、と相手を非難した歌と理解すべきではなかろうか。贈歌が難波の「葦」の「うら葉」から恨みを導いたのに対し、答歌では、葦＝悪しとして、同じ地名・景物を用いながら、贈歌に言い返したのであろう。

三、13番歌―「もみし」

次は13番歌である。二句目のみ翻刻のままとした。

この御息所参りて、花のおもしろきを蔵人たちの許に遣りける
この花のもみしのなかに我が恋はいくらこもれり誰にとはまし

作者は詞書に「この御息所」と示されるが、本歌の前の12番歌は「御返し」の詞書を持つものの、その贈歌に当たる歌は脱落と思しく空白があり、その前に詞書「同御息所、ひさしう参らせざりければ、長谷にぞたてまつると聞かせ給ひて」のみが見える。ここでいう「同御息所」は、10番歌の詞書に「伊衡の宰相、むすめを奉りたりけるがまかでゝ里に二日ばかりありて参らせける」と見える、藤原伊衡女を指すと考えられる。12番歌の前に脱落があって明確ではないが、13番歌の「御息所」も、同じく伊衡女と解釈しておく。[12]「蔵人」は、14番歌の詞書に「一条とて興ある歌よみありけり」とあって、一条という女蔵人だと考えられる。

この歌で問題になるのは「もみし」である。『新編国歌大観』は「もみ」にママと振っており、疑問としている。勝又祐司はこの歌を「この花の紅葉の中に我が恋はいくらこもれりたれにとはまし」として引いている。[13]「もみし」を「紅葉」と理解するのだが、「紅葉」を「もみじ」と表記するであろうか。古代中世の和歌で「もみぢ」を「もみじ」と表記した例は管見に入っていない。またそもそも「紅葉」だとしても、「花の紅葉」とは何を指すのだろか。花と紅葉が同時に詠まれた例は確かにある。

（題しらず　よみ人しらず）
ふる雪はきえでもしばしとまらなん花ももみぢも枝になきころ　（後撰集・冬493）

子ふたり侍りける人の、ひとりは春まかりかくれ、今ひとりは秋なくなりにけるを、人のとぶらひて侍りければ　（よみ人しらず）
春は花秋は紅葉とちりはててたちかくるべきこのもともなし　（拾遺集・哀傷1311）

これらはいずれも、春の花と秋の紅葉とが並列的に詠まれており、「花の紅葉」ではない。『万葉集』に次のような例がある。

寄レ花
この山の黄葉の下の花を我れはつはつに見てなほ恋ひにけり　（巻七・譬喩歌1306）

これは黄葉の陰にある花を詠んでおり、「花の紅葉」とは異なる。

そもそも、13番歌は詞書にあるように「花のおもしろき」を詠んだはずであり、紅葉が出てくる必然性はない。つまり「もみじ」を「もみぢ」と理解しても不審なのである。

ここで注意したいのは下句である。「はなのもみし」は不審だが、その「はなのもみし」の「中」に「我が恋」が「いくら籠もれり」と詠んでいる。そこで想起されるのが次の万葉歌である。

藤原朝臣広嗣桜花贈二娘子一歌一首

この花のひとよの内に百種の言ぞ籠もれるおほろかにすな

娘子和歌一首

この花のひとよの内は百種の言持ちかねて折らえけらずや

（巻八 1456、1457）

藤原広嗣が娘子に桜を贈る際に詠んだ歌とその返歌である。広嗣が、この桜の花の「ひとよ」[14]の中に、「百種」（＝多く）の言葉が籠もっているのだ、粗略にしないで下さいと詠み、娘子が、この花の「ひとよ」の中に、多くの言葉が籠もっており、その言葉を持ちきれなくて、折れたのではないでしょうかと答える。

特に広嗣の歌である。「この花のひとよの内」に「百種の言」が「籠もれる」と詠んでいる。それに対して13番歌は、「この花のもみしの中」に「いくら」「恋」が「籠もれり」というのである。13番歌は疑問形となっているが、用語・構文が近似している。本歌は広嗣歌を換骨奪胎して詠まれているのではないだろうか。要するに、「もみし」は「ひとよ」の誤写ではなかったか。校訂して示してみよう。

この花のひとよのなかに我が恋はいくら籠もれり誰にとはまし

この花の「ひとよ」の中に、私の恋はどれほど籠もっているのだろうか、誰に尋ねようかしら、そういう歌として理解できるのではないか。

広嗣歌では、「この花のひとよ」に多くの言葉、それは娘子に対する恋の言葉であろう、それが「百種」も籠もっていると詠まれていたのだが、13番歌は広嗣歌を踏まえて、「この花のひとよ」に、私の恋がどれほど籠もっているのだろうか、と問いかける形に詠み変えていると考えられるのである。これに答えた一条の和歌は、

大空に満つとは聞きし恋なればいくらか花のことと知らせむ

である。下句の「花のこと」も、あるいは、広嗣の「花の」「百種の言」を踏まえた表現と見ることはできないだろうか。この一条の和歌も難解だが、「わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし」（古今集・恋一488）を踏まえて、「大空に満ちるのだと聞いた恋なので、どれほど花の（中に込められた恋の）言葉があるのだろう（入りきらないはずだ）とお知らせしたいものだ」という意として理解できようか。

以上、13番歌は、広嗣歌を利用したと考え、「もみし」を「ひ

とよ」の誤写と判断したい。「ひとよ」と「もみし」ではあまりに遠いようにも思われるが、「と（止）」と「み（三）」、「よ（与）」と「し（之）」の字形相似による誤写はありえよう。

なお、御集で万葉歌を利用する例は他にも見える。5番歌をあげよう。

同じ三条の母宮す所うせ給へると聞かせ給ひて、いみじう悲しびさせ給ひて、暁に郭公の鳴きければ
亡き人の宿にかよはばほととぎす我がかくなきて恋ふとつげなん

「三条の母宮す所」[15]が歿したと聞いて醍醐が詠んだ歌なのだが、この歌について久曾神昇は「古今「かけてねにのみなくとつげなむ」」と注している。異同はあるが古今歌と認定しているのであろう[16]。次の歌である。

題しらず　よみ人しらず
なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ
（古今集・哀傷855）

しかし、下句は、末尾「つげなん」以外は異なっている。御集底本は集付が丁寧になされているが（誤りもある）、本歌には付されていない。別の歌との判断であろう。古今歌では、亡き人の宿に通うのなら、郭公よ、「私はあなたの死を悼んで声に出して泣いている」と告げてほしい、といい、悲しみを死者に伝えようとする内容である。御集歌も、亡き人の宿に通うのなら、と郭公に呼びかけて、「つげなん」と詠むのは同じだが、告げるのは「かくなきて恋ふ」、こんな風に泣きながら恋しく思っているのだ、という内容である。泣きながら恋しく思うという心情は、哀悼だけでなく恋情も示しており、御息所の死を悼む天皇の歌としてふさわしい。古今歌を御息所の死という情況に合わせて詠み変えたとも考えられるが、この歌は、古今歌と、次の万葉歌を組み合わせて作られたと推測する。

大伴坂上郎女歌一首
暇なみ来まさぬ君にほととぎす我れかく恋ふとゆきて告げこそ
（万葉集巻八・相聞1498）

この歌は、坂上郎女が、「我れかく恋ふ」、私はこんなに恋しく思っているのだと、来ない男に対して、郭公に言付けを頼む歌である。郭公に「告げこそ」と依頼すること、その内容が「われかく恋ふ」であることなど、醍醐歌に近似する。郎女歌は、「われかく恋ふ」と告げるように相聞歌であるが、醍醐歌では、そこに「泣きて」を挿入することで哀傷歌として仕立てているといえようか。「われかく恋ふ」[17]（わがかく恋ふ）といういい方が他に見出しがたいことからも、この5番歌は、古今歌と万葉歌の歌句を組み合わせて作られたと考えてよかろう。

本集にはこのように万葉歌を利用した歌が収載されている

のだが、13番歌もその一つとして数えられることになる。

四、詞書の不審―25番詞書「この御門は」

以上、三首の和歌について校訂私案を示した。13番歌についてはかなり臆測を含む私案であるが、2番、16番はそれなりの根拠を持つと考える。

『延喜御集』は近世初期写の一本しか伝本がなく意改に頼らざるを得ない部分が多い。それでも和歌はある程度の類型性を持つので、いくつかの可能性を想定しえるが、詞書に関してはそれも難しくなる。しかし、それでも校訂しなければ読めないところが多い。詞書の不審について、一箇所であるが校訂私案を出してみよう。25番歌詞書である。

この御門は、始め東宮にすへ奉り給へりける、大宮の御腹なりけり。御かたちもいとめでたくおはしましければ、御をぢの大臣、二人ながら御むすめたてまつり給ふ。東宮に位ゆづりたまはむときこえ給ひけるほどにかくれさせ給ひにければ、天の下、恋ひたてまつらぬ人なかりけり。

春深きみやま桜も散りぬれば世をうぐひすの鳴かぬ日ぞなき

この詞書は難解で知られているが、それは冒頭部分に集約しているといっていい。冒頭の「御門」が誰を指すかである。この御門は、最初に東宮にお据え申し上げなさった、大宮腹である、と「御門」について説明する。「大宮」が醍醐后の藤原穏子を指すことには異論がない。ここでは「御門」が大宮腹の東宮の兄弟であると記していることになる。平野由紀子が以下のように整理している[18]。

(1)「この御門」は、はじめ立坊した東宮と同母兄弟であること
(2)容姿がすぐれていたこと
(3)おじの大臣二人それぞれの娘が入内したこと
(4)東宮に譲位する寸前になくなったこと
(5)（このあとの二六の詞書に）乳母の命婦のむすめに「大輔君」がという人がいること

このようにまとめ、(2)(3)(5)からは保明親王が該当するが、(1)(4)が史実に合致しないと指摘する。保明は即位していないからである。

また、平野は、「冒頭の「だいごときこえさせ給ひける」帝として登場する際「この御門」と指したことは一度もなかった」として、この呼称を「異質」だとも評している。しかし、この前の24番歌には「うへ、御かへり」として醍醐の返歌が記されており、「この」とある以上、やはり醍醐を指すと見るしかないのではないか。本集では天皇を明示する場合は「みかど」「うへ」として示しており、「この」とある以上、24番の「うへ」を承けて醍醐と理解せざるを得ないのである。しかし、醍醐とすると矛盾してしまうのは平野が指摘するとお

りである。

土居奈生子[19]も疑問を呈し、「この御門」は朱雀か村上を指し、「御かたち……」以後、主語は東宮（保明）に変わるという。そうすれば、平野の疑問も解消されることになる。

しかし、「この御門は」と「は」で提示された主体が、次の文章で、新たに主語が示されないまま主語でなくなるということは構文上難しいのではないか。「東宮は」などとして改めて語り始められない限り、「御かたち……」の主語が東宮であるとは理解しづらい。「御門」を主語として続けて読むのが自然で、だからこそ平野のような疑問に繋がるのである。

従って、「この御門は」の部分をどう考えるかである。ここは、「は」を「の」に校訂すべきではなかろうか。

この御門の始め東宮にすへ奉り給へりける、大宮の御腹なりけり。御かたちもいとめでたくおはしましければ、……

この御門が最初に東宮にお据え申し上げなさったのは、大宮腹であった、となり、「この御門」＝醍醐が最初に東宮にしたのは大宮腹（の保明）であったと、東宮に関する説明をしている文章だと理解できる。以下は、その東宮の話となるので矛盾はしなくなる。

底本では、この「は」の字母は「八」で、極めて「の（乃）」に近い形である。底本では他にも「は（八）」をこのような形で記しているので、「は」として書いているのは間違いないが、親本あるいはそれ以前の段階では「の」であったのではないか。詞書の文脈からしても「は」を「の」に校訂すべきだと考える。[20]

おわりに

『延喜御集』の和歌及び詞書について不審本文をとりあげ、校訂私案を提示した。近世初期の写本であり、参照すべき他文献も少ない本集は、意改によって読まざるを得ない部分がある。底本を尊重することは大事だが、不審本文はできるだけ校訂すべきであろう。[21]

傷のない本文というのはまず存在しない。であれば、できる限りその傷を修復する必要がある。[22]それは、たとえ著者自筆本であったとしても同じである。近年、後藤康文が『土佐日記』貫之自筆本に不審本文があることを指摘し、校訂案を出している。[23]底本を尊重することは当然だが、不審は不審であると明言し、校訂案を提出するのを躊躇しないようにしなければならないのではないか。もちろん恣意的な校訂は禁物であるし、読解力不足によって、不審ではないところを不審としてしまう愚も避けねばならない。本稿もそのような愚を犯しているのではないかと恐れる。

【注】

（1）本文は新潮日本古典集成に拠る。

（2）橋本不美男「醍醐天皇」（『私家集大成1　中古Ⅰ』明治書院・一九七三年）、加藤静子「延喜御集」（『和歌文学大辞典』古典ライブラリー・二〇一四年）。

（3）片桐洋一「延喜御集」（『新編国歌大観巻七　私家集篇Ⅲ』角川書店・一九八九年）。

（4）国書データベース『代々御集』（https://doi.org/10.20730/10005289 1）にて確認できる。

（5）この故事については、梁青「平安朝漢詩文に詠まれた「衣錦還郷」」（和漢比較文学63・二〇一九年）、同「平安文学における朱買臣故事の変容」（比較文化研究139・二〇二〇年）を参照。

（6）本文は中華書局版による。

（7）今野厚子「『延喜御集』の影響―『源氏物語』の享受―」（『天皇と和歌―三代集の時代の研究―』新典社・二〇〇四年、一九八一年初出）、目加田さくを「天皇御集㈣延喜御集」（『私家集論㈠』笠間書院・一九九一年）、平野由紀子「物語的家集―延喜御集を中心に―」（『平安和歌研究』風間書房・二〇〇八年、一九九二年初出）、勝又祐司「『延喜御集』の性格」（中古文学論攷17・一九九六年）、小林美陽「『延喜御集』についての研究」（信大国語教育9・二〇〇〇年）など。

（8）明石の浦と月については、小山利彦「「源氏物語」須磨・明石の巻に照る月―構造と方法への展開―」（『源氏物語を軸とした王朝文学世界の研究』桜楓社・一九八二年、一九七七年初出）がある。今野「『延喜御集』の影響―『源氏物語』の享受―」（前掲）は、小山論を踏まえつつ、「月かけのあかしのうら」の表現について検討している。以下に掲出する用例には小山論・今野論と共通する和歌がある。なお、今野は、「たひなかせる」は校訂しておらず、特に言及もない。

（9）醍醐歌は、次の『古今和歌六帖』（第三1828）歌を踏まえていよう。

（ふね）

潮瀬こぐかたかけ小舟流るともいたくなわびそ梶取りゆかん

「潮瀬」「舟」「流る」「いたくな……そ」「梶取り」など道具立てが近似する。但し、醍醐歌の「梶取り」が名詞であるのに対し、六帖歌が梶を取ってとゆこうと詠むところは異なる。なぜ醍醐が蔵人を慰める際に「梶取りの長」と呼びかけたかは、六帖歌を踏まえたとしてもよく分からない。あるいは、梶（楫）は忠節なる臣下を喩える場合がある。「若済二巨川一、用レ汝作二舟楫一」（尚書・商書・説命上）、「勿レ使下朕当二淵水奔馳之危一、以無中舟楫御轡之備上而已」（菅原道真「答丁太政大臣謝丙為レ病賜二度者一免乙罪人甲勅」菅家文草巻八）などがそれである。これらをまえたと考えるのは臆測に過ぎようか。なお、『尚書』の本文は十三経注疏（藝文印書館）に、『菅家文草』は元禄十三年刊本に拠った。

（10）『後撰集』恋五943「しのびたる人に」。なお、『亭子院御集』（『資経本私家集　一』冷泉家時雨亭叢書65・朝日新聞社・一九九八年）にも入集しており、この場合は宇多の和歌ということになる。また『続古今和歌集』恋五1280には「延喜御歌」として載る。本文にも揺れがある。本文の相違については、笹川博司『奈良御集・仁和御集・寛平御集全釈』（風間書房・二〇二〇年）の「寛平御集」当該歌注釈参照。

（11）平野「物語的家集―延喜御集を中心に―」（前掲）。

(12) 片桐洋一「延喜御集」（前掲）は、「その伊衡の娘である中将の御息所のとの贈答（一〇～一三）を置く」としており、一連の歌群と考えている。

(13) 勝又祐司「『延喜御集』の性格」（前掲）。

(14) 「ひとよ」は、花びらのひとひらとひとまずは解しておく。ここでは、花びらのひとひら、あるいは一枝とされる。

(15) 藤原定方女能子とされるが、能子の死は醍醐の歿後である。平野「物語的家集―延喜御集を中心に―」（前掲）参照。平野が指摘するように実際には醍醐の歌ではない可能性が高いが、ここでは御集に即して読む。

(16) 久曾神昇『八代列聖御集』（文明社・一九四〇年）。平野「物語的家集―延喜御集を中心に―」（前掲）も「古今集哀傷の題しらずよみ人しらず……を使ったものであろう」という。

(17) 近い例としては、「しるや君しらずはいかにつらからむわがかくばかり思ふ心を」（拾遺集・恋二754）があるが、この歌程度しか見えない。

(18) 平野「物語的家集―延喜御集を中心に―」（前掲）。

(19) 土居奈生子「〈大宮〉考―仮名文学に見る藤原穏子―」（成蹊国文49・二〇一六年）。

(20) 他にも詞書で校訂すべき例がある。大きな不審本文は、31番詞書の冒頭、「おとゝくら人」である。この「おとゝ」は「五位」の誤りだと考える（五位→大臣→おとゝ）。今のところ臆測の域を出ないので、本稿では取り上げなかった。

(21) 本文校訂だけではなく、濁点の問題もある。本集は『新編国歌大観』では濁点が付されているが疑問も存する。7番の歌をあげると、

またしとてたのめし物をあけくれにまとはていてし人はうかりき

とある。『新編国歌大観』では初句を「またじ」と「し」に濁点を付している。この歌については平野「物語的家集―延喜御集を中心に―」（前掲）が言及しているように、「まだし」とすべきである。

(22) 工藤重矩「国冬本源氏物語藤裏葉巻の本文の疵と物語世界―別本の物語世界を論ずる前提として―」（中古文学92・二〇一三年）は、『源氏物語』の各伝本の本文をそのまま読み解き、大島本との物語世界の違いを論じる方法に関連して「本文の疵による独自異文を、意図的な、何か意味のある本文として解釈しようとする傾向」を批判する中で「その本文が疵つく前のかたちへの復元を試みる必要がある」と述べているが、本稿で論じたのも、その「復元」作業である。

(23) 後藤康文「『土佐日記』誤写考―〝貫之自筆本〟本文を疑う―」（久保朝孝編『危機下の中古文学2020』武蔵野書院・二〇二一年）、「続・『土佐日記』誤写考―再び〝貫之自筆本〟本文を疑う―」（語文研究134・二〇二二年）、「『土佐日記』不審本文考（一）」（北海道大学文学研究院紀要170・二〇二三年）。

〔引用本文〕＊注記した本文以外

延喜御集―新編私家集大成（日本文学web図書館）。国書データベースの画像で確認した。本文を掲出する場合、特に断らない限り、適宜漢字を宛て濁点を付した。漢字を宛てた場合、元の仮名をふりがなとして残した。漢字には送りがなを追加した場合がある。詞書には適宜句読点も付した。なお、歌番号は算用数字で

示した。

万葉集―佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『原文万葉集(上)(下)』（岩波文庫・二〇一六年）の訓を用い、適宜漢字を宛てた。

その他の和歌―新編国歌大観（日本文学web図書館）を用いた。本文は適宜表記等を改めた場合がある。歌番号は算用数字で示した。

引用本文中、漢字は原則として通行の字体を用いた。……は中略を示す。また、和歌で、詞書・作者が記されず、遡って確認できる場合には（　）を付した。

〔付記〕

延喜御集は、二〇二四年度学部演習で取り上げた。本稿の内容はその際の議論に基づくところがある。

（たきがわ・こうじ　本学教授）